

〔論文〕

幼児期における自尊感情の発達

中 井 美 希
Miki Nakai

相賀幼稚園

要旨：本研究の目的は、幼児の自尊感情を測定する尺度を作成し、幼児期の自尊感情の実態を明らかにし規定要因について分析・検討することである。

研究1では、予備調査、本調査を実施し、自尊感情を構成する要因の一部として自己有能感、自己効力感、自己有用感の3因子7項目から構成された幼児用自尊感情測定尺度を新しく作成することができた。

研究2では、幼児の自尊感情における発達の諸側面の一部を明らかにし、過去の対人関係における遊び経験との関連を検討し、幼児の自尊感情の形成を規定する要因を分析することを目的とした。

幼児の自尊感情の発達の側面を、幼児用自尊感情測定尺度を用いて調べたところ、自己効力感≠自己有能感 > 自己有用感の関係で有意な差を示した。

次に、過去の対人関係における遊び経験を、友だちとかかわり合う遊び経験の程度と、砂場遊びの経験の程度から捉え、それらの経験の程度を「うれしい」という感情体験を介して4段階評価で調べた結果、かなり高い評価水準の遊びを経験していることがわかった。

続いて、幼児が過去に経験した対人関係のある遊びの経験の程度が、自尊感情の形成を規定する要因として作用する可能性を検討したところ、過去の対人関係のある遊びの経験の程度が高い水準にある幼児ほど、自尊感情の形成度、つまり発達が大幅良好であることが明らかになった。

キーワード：幼児、自尊感情、遊び、対人関係

問題と目的

1. 問題

(1) 自尊感情の意義

自分自身の自己評価が満点であるという人間はこの世の中にどのくらいいるのだろうか。日本の子どもは、自尊感情の育ちがひ弱であるという声を実際の教育実践の現場からしばしば聞くことがある。

日本青少年研究所(2012)の研究によれば、「日本の高校生は自分を〔価値ある人間〕と思う自尊心が、アメリカ・中国・韓国の高校生に比べて低い」と報告されている。また高校生だけではなく、日本の中学生も自己に対する認識が否定的に捉えられていることを述べている(同研究所, 2009)。

日本の子どもたちは、自分の能力に対して自信がもてない、友だちと比べて自分はだめな人間だと否定的な自己評価をしている子どもが多いというのである。

ところで、自尊感情の研究については、ローゼンバーグやジェームス等を始め、日本でも多くの研究報告がなされてきている。自尊感情とは、心理学辞典(2005)では、「自分自身や自分の意見あるいは自己についての評価」と定義されている。また、自分自身に対する現実的で好意的な見方と自己評価を肯定的に捉える感情である

ともされている(グレン・R・シラルディ, 2011)。

また、自尊感情は、自分自身に対する肯定的な自己評価に留まらず、他者からの評価も自尊感情の発達に影響していることが指摘されている。自尊感情については、私的自尊心という自己評価と、社会的自尊心という他者からの評価(心理学総合辞典, 2006)の二つの評価から自尊感情が構成されているという捉え方もある。伊藤・小玉(2005)らは、「自己価値の感覚が外的な基準に依存している随伴性自尊感情と、自己価値の感覚が社会的な成功や失敗に依存しておらず、自分が自分自身でいられる本当の自尊感情」と自尊感情を2つの側面から成り立っていることを指摘している。

以上の従来の諸研究によれば、自尊感情には、自分自身の能力や行動特性を肯定的に評価する自己評価と、他者からの評価や自分以外の基準に合わせて自己を評価する他者評価から成り立っているとみなされている側面があるのである。

(2) 自尊感情の発達

では、自尊感情はどのように発達するだろうか。自尊感情が育つ背景には、乳幼児期に親しい大人から、肯定的に受容され、自分は愛されているという感覚をしっかりと味わうこと(汐見, 2011)が重要である。そして、

成功体験の積み重ねや、大きな目標を掲げるのではなく、小さな目標の設定を数多く重ね、目標を達成する気持ちを味わうこと（汐見，2011）で自信をもてるようにすることも自尊感情の発達に影響しているのである。

他者と比べて自分を評価するのではなく、自分が設定した目標は達成できたか否かで自己を評価すること（股村，2007）と、自己評価をする際には、他者との比較だけで判断するのではなく、自分自身の目標や目的が達成できたかなどとかわかり、現在の自分と理想の自分を比較し評価できるようにすることも自尊感情の発達に重要な要因となるのである。

Denis Lawrence（2008）は、自尊感情そのものの捉え方を「自己像と理想自己の不一致についての個人的評価」と述べているが、自尊感情が形成されていく過程では、現在の自己像を把握すること、憧れや目標などを抱き、自分自身を向上させる理想の自己像を持ち、そこに肯定的な評価ができることが望まれるのである。そこで、本研究で取り上げる自尊感情とは、現実の自己像と理想の自己像の隔たりを肯定的に評価することとして定義付ける。

（3）幼児期の子どもの自尊感情

自尊感情の研究はローゼンバーグを始め多くなされていることが知られている。その研究の対象年齢は、ほぼ小学校低学年から青年期以降にかけてである。小学校教育では、教科教育が始まり、テスト等の点数に反映する学力で評価がされる機会が増える。そのような、評価により、自尊感情の発達の過程で肯定的あるいは否定的な影響が生ずるであろう。学校における学習経験のこのような背景も踏まえ、児童期以降の時期における自尊感情の研究が多くなされている傾向があるのであろうと考えられる。

では、比較的研究の対象とされていない就学前教育の時期にある、幼児期の子どもの自尊感情の育ちの実態はどのようなになっているのであろうか。

幼児の自己認識として、小学校低学年頃までには、目に見える形で他者と比較して、他者からの評価を取り組む形で自己に対する肯定的または否定的な感情を形成する（眞榮城，2012）と言われている。就学前教育ではいわゆる授業を介しての学力で評価されることはなくても、子ども自身が友だちと比較して、自分自身の能力や行動特性を相互的に評価することはあるのであろう。実際に、子どもたちの遊びの中で、目に見える形で比較できる遊びは多く存在する。例えば、鉄棒では逆上がりができる・できない、走るのが遅い・速いなどがある。このような目に見えるだけの結果（できる・できない、早

い・遅い、上手・下手等）で評価をすることは、自尊感情の育ちを促したり、妨げる場合もあると考えられる。

今まで自尊感情の研究で対象年齢とされることが少なかった、乳幼児期の子どもたちでも、遊びを通して、自分と友だちとの相互的な比較や評価を自分自身の能力や行動について行い、自己像を形成している場合がかなりあるものと思われるのである。従って、幼児期の子どもも自己を形成していく過程で、友だちとのかかわりによって自分を肯定的・否定的に捉える感情も形成されているのではないかと考える。このような従来の研究の動向によっても、幼児期の子どもに焦点をあてた自尊感情の研究を進め、幼児の自尊感情の発達の実態とその要因について明らかにする必要がある。

（4）子どもの遊びと自尊感情

幼児期の子どもにとって遊びとは、心身の発達に必要な学習経験であり、基本的な心理過程の形成に重要な影響を与え、子どもの心身の発達に大きな役割を果たしているとされている（小林，1969）。これまでに、Vygotsky（2001）が主導的活動の概念について述べているのは有名であるが、勅使（1999）も、遊びは「発達を決定づける主導的な活動」であると捉え、子どもの発達にとって、日常生活で獲得される能力よりも、子どもが遊びから獲得する能力の方が非常に大きいことを述べ、子どもにとっての遊びは重要な活動であることを報告している。

幼児期の子どもの遊びは、生活の多くを占め、また、基本的な生活スキルの獲得に加え、精神的・知的・運動機能の発達も促すものと考えられるのである。

一方、4～5歳ごろになると、友だち同士のかかわりが複雑になり、一人遊びを経て協同的な遊びへと発展していく時期である。長橋（2013）は、「幼児期の現実の遊びは、複数の子どもたちによる協同遊びとして展開されることがほとんどである」と指摘している。従って、この時期に友だちとのかかわりが自尊感情の発達に大いに影響しているところに注目する必要がある。

自尊感情は自己評価と他者評価の2側面から形成されている（伊藤・小玉，2005）ことをすでに述べたが、幼児期の子どもたちの遊びでも、自分以外の基準に合わせて評価をする他者評価によって、優越感や劣等感を味わうことが多くあるのではないかと考えられる。

児童期以降だけではなく、幼児期の子どもも目に見える友だちとの発達の差に対して、「はくはだめだ」「わたしはともだちより、下手だ」などの感情が働き、自分を過小評価してしまうことや遊びへの参加を躊躇してしまうことがあるだろう。

もちろん幼児の自尊感情の形成には多くの要因が作用

しているものと考えられるが、本研究では、友だちとの遊びを介しての相互的なかわりがこの時期の自尊感情の発達に対して、大いに影響していると考え、幼児期の子どもの自尊感情についての実証的な研究を行うことにする。すなわち、友だち同士のかかわりを踏まえた遊びに注目し、幼児の自尊感情の形成の実態を把握し、その規定要因としての友だち同士の遊びのかかわりの影響を明らかにする。

2. 目的

本研究では、以上のような自尊感情の発達に関する研究の状態を踏まえ、以下の二つの研究課題を研究目的として取り上げる。

- ① 幼児の自尊感情の発達の水準を客観的に測定する尺度の作成を行う。
- ② 幼児の自尊感情の発達の实態を明らかにし、その規定要因としての集団生活における遊びを通しての友だち関係の効果を分析・検討する。

研究1 幼児用自尊感情測定尺度の作成

1. 予備調査

1. 目的

本調査で使用する幼児用自尊感情測定尺度作成の可能性と調査手続きの適切性を検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

O県の幼稚園に通う、14名の年長児・年中児を対象と

した(男児:10名、女児4名)。質問に対する回答が全て遂行できなかった1名は分析対象から除いた。最終的に分析対象となったのは13名(男児:9名、女児4名)である。

畠山美穂・畠山寛(2012)は、4歳ぐらいまでの間に、ほとんどの幼児が単純な状況であれば他者の嬉しさや悲しさを認識し、適切な情動で応答するようになると、4歳児までの他者の感情の理解について述べている。

一方、年中児・年長児は、他者との関係がより複雑にかかわり合う時期であり、自分と他者の存在の違いを考え始め、日常生活の中で多くの対人的な葛藤も経験し始めている時であろうと考えられる。従って、今回はほぼ他者の感情を理解する能力が備わってきているだろうと考えられる年中児・年長児を調査の対象とした。

(2) 調査期間

調査は、2013年6月20日の14時～16時までの時間にわたり実施した。

(3) 調査材料

① 質問項目の内容について

予備調査のために、原案幼児用自尊感情測定尺度に使用する9個の質問項目を作成した。

榎本(2011)は、子どもが自分の長所や短所をどのように理解するかについて、身近な人物がどんな言葉をかけるかに大いに依存していることを指摘している。ここで述べられている身近な人物とは、親や教師、友達のことである。従って、自己像を作り上げて自尊感情を形成していく過程でこれらの人物との対人関係は多いに影響を与えていると考えられる。

そこで、尺度の具体的項目は自尊感情の育ちにかかわ

Table 1 原案幼児用自尊感情測定尺度

1	ぼくは ともだちが こまっていたら おしえてあげようと おもいます。
2	ともだちは わからないことを ぼくに きいてくれます。
3	ともだちは あそんでいるとき ぼくを みとめてくれます。
4	ぼくは ともだちと いっしょなら できます。
5	ぼくは ともだちが おしえてくれたら できそうと おもいます。
6	ともだちに おしえてあげられたら ぼくも できそうな きもちになります。
7	ぼくは ともだちと いっしょなら あそぶことが できます。
8	ぼくよりも じょうずな ともだちと あそべます。
9	ぼくは ともだちを あそびに さそうことが できます。

Table 2 幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度

1	ぼくには いいところがあるとおもう。
2	ぼくは じぶんを すきに なりたい。
3	ぼくは みんなと おなじくらい うまく できる。
4	ぼくは じぶんを だいたい まんぞく している。
5	ぼくは ともだちを たすけて あげられてないと おもう。
6	ぼくは みんなと おなじくらい ひつようと されている。

りがあると思われる対人関係を中心に作成した。また、尺度作成にあたっては、実際に保育所での自由遊び時間に観察を行い、子ども同士のかかわりの中で現実に起こっている行動を尺度項目に取り入れた。さらに、具体的な質問項目については、幼児期の子どもが十分理解できるよう、心理・健康領域を専攻する大学院生4名と発達・臨床を専門とする大学院教員1名とで、内容的妥当性につき十分検討を加え決定した。

また、本尺度の併存的妥当性に関して予備的に検討するために、10項目からなるローゼンバーグ自尊感情尺度を基準尺度として使用することにした。ただし、同尺度の内の4項目の内容は対人関係とは関係ない内容であったため省き、残り6項目を幼児版の対象として使用できるよう質問内容の表現に修正変更を加えて（以下、幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度と表記する）使用した。

② 反応選択肢

本研究の測定尺度の実施に際しては、原則として発問に対する回答を被調査者（幼児）に反応4選択肢の該当選択肢1つに指さすことを求めた。その際、反応選択肢を○で表した（Figure 1）。質問内容に対する回答では、自尊感情の形成の程度を捉えるため、○と×で判断を求めると、マイナスの感情を反応する場合、×の該当選択肢を使用すると良くないイメージが視覚的に作用し、被調査者である幼児のありのままの感情を聞き取ることができないことが予測される。つまり、年中・年長児の場

合でも、社会的望ましさの判断が選択反応に介入するおそれがあるため、○の大きさと色を変え反応選択肢を表記することに配慮した。

（4）手続き

調査は個別式対面面接法を使用する形式で行い、面接調査時間は被調査者である幼児一人につき10分～15分程度とした。調査者は大学院生2名とした。調査は、その実施手続き上、調査者間で差異があると子どもの質問内容に対する反応の結果に影響が生ずる可能性があるため、調査前に、予め作成した実施手引きについて調査者間で調査手続きにつき確認を行った。

また、被調査者の年齢水準を考慮して、調査場面で注意が散漫しないように保育室とは別の個室を利用し調査を実施した。

3. 結果

（1）原案幼児用自尊感情測定尺度の予備因子分析

原案幼児用自尊感情測定尺度について、本調査に向けてまず予備因子分析（最尤法・バリマックス回転）を行った（Table 3）。

その結果によれば、原案幼児用自尊感情測定尺度は3つの因子から成り立っていることが推測された。

（2）原案幼児用自尊感情測定尺度の妥当性の予備検討

原案幼児用自尊感情測定尺度（Table 1）と、本研究

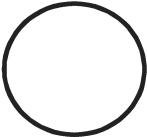


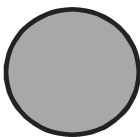
ぼくは ともだちが こまっていたら おしえてあげようと おもいます。			
			
とてもそうおもう	そうおもう	おもわない	ぜんぜんおもわない

Figure 1 原案幼児用自尊感情測定尺度に用いた反応選択肢

Table 3 原案幼児用自尊感情測定尺度の予備因子分析の結果

質問項目	因子		
	1	2	3
1 ぼくは ともだちが こまっていたら おしえてあげようと おもいます。	.982	.155	-.105
5 ぼくは ともだちが おしえてくれたら できそうと おもいます。	.905	.208	.005
7 ぼくは ともだちと いっしょに あそぶことが できます。	.829	-.553	.075
8 ぼくよりも じょうずな ともだちと あそべます。	.619	.441	-.143
3 ともだちは あそんでいるとき ぼくを みとめてくれます。	.581	.288	.564
9 ぼくは ともだちを あそびに さそうことが できます。	.241	.206	.185
6 ともだちに おしえてあげられたら ぼくも できそうな きもちになります。	.098	.699	.426
4 ぼくは ともだちと いっしょなら できます。	.111	.617	-.020
2 ともだちは わからないことを ぼくに ききます。	.188	.000	-.825

のため質問項目の具体的な内容について、幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度（Table 2）との関連性を検討した。併存的妥当性の検討を行うに際して、幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度については、「5 ぼくは ともだちを たすけて あげられてないと おもう。」の項目は、逆転項目のため5点から回答の粗点を減ずる変換をして尺度得点を算出した。

原案幼児用自尊感情測定尺度と基準尺度のローゼンバーグ自尊感情尺度との相関（併存的妥当性）については、 $r=.667$ ($p<.05$) の相関係数を得られた。従って、作成を意図している幼児用自尊感情測定尺度の妥当性を予測できる結果がほぼ得られたと言える。

4. 考察

幼児用自尊感情測定尺度の作成の可能性と調査手続きの適切性を検討する目的で予備調査を行った。その結果、基準尺度とした幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度と予備調査のための原案幼児用自尊感情測定尺度の相関性には、強い有意な相関が見られた。よって、幼児用自尊感情測定尺度の妥当性を予測できる結果となった。

今回、基準尺度としたローゼンバーグ自尊感情尺度を修正変更するにあたっては、実際に、現役の保育者にも内容の確認を求め、幼児が十分理解できるよう、質問内

容の検討をかなり綿密に行った。その結果、被調査者から、言葉の意味に対しての質問もなく、質問に適切に回答がなされたことなどから、非常に分かりやすい内容となる幼児版への修正変更を行うことができたと判断した。

調査手続きの適切性について検討したところ、まず、個別式対面面接法を使用したことに関しては、被調査者と対面形式で向き合うことにより、質問内容の理解を促し、回答に対する反応を円滑にするなど、この面接法が適切であることを確認することができた。また、被調査者の発達水準の年齢を考慮して、注意が集中しやすい条件が確保できるよう、調査の実施を通常使用されている保育室とは別の個室を用意を行ったことについては、被調査者が調査に専念して取り組む上で有効であることがわかった。

このように、日常の保育室とは違う空間の中で調査を行うことは、被調査者にとって心身ともに緊張する経験をもたらした側面もあるものと思われる。調査に対するこのような緊張をほぐすため、調査における具体的な発問に入る前に、被調査者に名前を聞き、好きな遊び、好きな食べ物など被調査者が話しやすい話題を交わし、ラポールの形成を図る時間を設けるように心がけたことにより、個別式対面面接法の適切性が高められたと考えられる。

原案幼児用自尊感情測定尺度の予備因子分析を行った結果では、原案は3因子から成り立っていることが分かった。この結果によれば、幼児用自尊感情測定尺度作成の可能性が実証され、幼児の自尊感情の育ちの実態とその規定要因等についての調査研究の方途が開かれたことが明らかになったと言えるだろう。

これまで自尊感情については、ローゼンバーグを代表に先人により多くの研究がなされてきた。しかし、主にその研究対象となる被調査者の年齢水準は児童期以降であった。確かに、児童期から青年期にかけては、自尊感情が育つ機会がしばしば体験される。加齢により、多様な人とのかかわり、自分とは違う考え方や生き方を知り、自己像を考える機会も多く存在する。従って、そのような対人関係の体験の中で、自尊感情の形成が促されたり、阻害されてしまう機会があることは容易に推定される。よって、自尊感情の研究の多くが児童期以降の個人についてなされることは納得できる事実でもある。

しかし、今回の予備調査の結果から、実際に幼児期の子どもにも自尊感情は年齢水準相応に育ってきており、自尊感情の育ちに対してこの時期における対人関係が規定要因の一つであることが分かった。榎本（2011）が述べているように、自分の長所や短所を周囲の人とのかかわりによって、理解する側面のある対人関係の中で、自己像が創り上げられていくことは今回の予備調査から明らかになったといえる。

被調査者である年中児・年長児の年齢水準では、日常の集団生活の中で友だちとかかわる時間が多く存在する。この友だちとかかわりによって、自分がなした行動をほめてもらったり、または間違っていることを指摘されたりすることで、自分とは何か等、自分自身の存在を確認できる機会が得られることであろう。従って、このような機会を多く経験することで、自尊感情が育っていくのではないと思われる。それゆえ、幼児の自尊感情の形成には、この時期に友だちとかかわる機会を経験する環境は必要不可欠である。

今回の予備調査でも「ともだちが こまっていたら おしえてあげよう おもう。」の質問に対し「とてもそうおもう」と回答する幼児が多く存在していた。この結果からは、友だちとかかわりの中で、相手に教えてあげる行いや相手を思いやる気持ちが育っていることが分かる。従って、ただ子ども同士がかかわる環境を与えるだけではなく、生活の中で教え合うや思いやる感情が育つ環境が必要であるということが示唆されたと言える。

Ⅱ. 本調査

1. 目的

幼児に適用できる幼児用自尊感情測定尺度を作成することである。

2. 方法

（1）調査対象者

M県下の保育園に通う、35名の年中児・年長児を対象とした（男児13名、女児22名）。ただし、調査資料を分析・検討するための被調査者は、調査における具体的な質問全てに回答できなかった1名を除き、34名（男児13名、女児21名）とした。

これらの幼児を調査対象者とした理由は、予備調査時に年中児・年長児を対象として調査を実施したところ、ほぼ、4歳になれば、友だちの気持ちを考えて答える質問内容に反応することができ、4歳までに他者の感情の認識ができるようになるという研究報告（畠山美穂・畠山寛, 2012）と一致する結果が得られたところによる。

（2）調査期間

調査対象とした保育所での保育実践の状況を考慮して、調査は、2013年8月～9月にわたり実施した。

（3）調査材料

予備調査に使用した原案幼児用自尊感情測定尺度に関する信頼性、妥当性の検討を加えたことによれば、本調査に適用が可能であるという結果が得られたので、予備調査に基づき原案幼児用自尊感情測定尺度（Table 1を参照）と基準尺度とする幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度（Table 2を参照）を使用した。

（4）手続き

被調査者とのラポールの形成を図るため、調査者は調査期間中、保育に参加し子どもとかかわる時間を多く設けた。調査を実施するに際しては、年齢水準を考慮し、できるだけ騒音が少なく、静かで注意が散漫しない条件を整えるため、保育室とは別に個室を用意し調査に入った。しかし、調査者と1対1で対面し個室で質問を受けるという状況のため、被調査者に心身の緊張が生ずることが推測された。そこで調査者は、調査に入る事前に、被調査者の名前、きょうだいの有無、好きな遊び、好きな食べ物、好きな動物などについて適宜に被調査者と対話を交わすなどの配慮をした。

調査方法としては、個別式対面面接法を使用し、調査で回答を求める時間は10分～15分程度とした。また、

調査実施当日の子どもの状態や、保育実践の状況を考慮し、保育者との相談の上、登園してきた子どもが身支度を終えた後に調査を実施した。

本調査では、複数の調査者で調査を実施すると、調査者間で被調査者に対する具体的な調査アプローチに個人差が生じ、同じ調査条件で各被調査者から反応を求めることが困難であると考え、筆者1人が調査者となり、単独で全ての幼児に対して直接調査を実施した。

また、調査が円滑に行えるように、あらかじめ調査実施のマニュアルを作成し、どの被調査者も同じ条件下で調査に反応し得るよう配慮した。

3. 結果

(1) 幼児用自尊感情測定尺度の因子分析

幼児用自尊感情測定尺度 (Table 1 を参照) について、因子分析 (最尤法) を行った。その結果に基づき、次に因子負荷量が .40 以下の項目を削除し、再度因子分析を行った (Table 4)。

この統計的な処理により、幼児用自尊感情測定尺度を構成する項目として7項目が残され、本尺度は3因子構造であることがわかった。

次に、バリマックス回転による因子分析を加えたところ、Table 5 の結果が得られた。第1因子は、友だちと一緒にできる気持ちになるなどの、自分には能力がある (眞榮城, 2012) ということを意味する項目から構成され

ており、「自己有能感」とした。

第2因子は、友だちと一緒に活動することによって、自分に期待できる気持ち (心理学辞典, 1991) が含まれている項目から成りっているため「自己効力感」とした。

第3因子は、友だちはわからないことを聞いてくれるなど、自分は友だちの役に立っていると思える感情 (南館, 1996) 等が関係しているため「自己有用感」とした。

また、本尺度の信頼性を検討するため、各因子の α 係数を算出した (Table 5)。その結果、 $\alpha = .59$ から .73 までの α 係数が得られ、本尺度については信頼性が認められた。

(2) 幼児用自尊感情測定尺度の妥当性の検討

併存的妥当性を検討するために、予備調査の場合と同様に基準尺度として幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度を使用し、同基準尺度と幼児用自尊感情測定尺度との関連性を検討した。

この関連分析を行う際には、「5 ぼくは ともだちをたすけて あげられてないと おもう。」の逆転項目については、予備調査の場合と同じく粗点につき5点から回答に該当する粗点を減ずる変換を行い、尺度得点を算出し分析を実施した。

この分析結果によると、幼児用自尊感情測定尺度と幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度との相関については、 $r = .655$ ($p < .01$) の相関係数を得られた。従って、本調査

Table 4 幼児用自尊感情測定尺度の因子分析の結果 (最尤法)

質問項目	因子		
	1	2	3
4 ぼくはともだちといっしょなら できます。	.999	-.006	-.001
7 ぼくはともだちといっしょに あそぶことができます。	.538	.327	.014
6 ともだちにおしえてあげられたら ぼくもできそうなきもちになりま す。	.528	-.160	.312
9 ぼくはともだちをあそびに さそうことができます。	.380	.891	-.049
5 ぼくはともだちがおしえてくれたら できそうとおもいます。	.385	.490	.113
3 ともだちはあそんでいるときぼくを みとめてくれます。	.114	.125	.909
2 ともだちはわからないことを ぼくにききます。	.341	-.124	.443

Table 5 幼児用自尊感情測定尺度の因子分析の結果（バリマックス回転）

質問項目	因子		
	1	2	3
自己有能感 ($\alpha=.65$)			
4 ぼくはともだちといっしょなら できます。	.945	.213	-.033
6 ともだちにおしえてあげられたら ぼくもできそうなきもちになります。	.640	.091	.305
7 ぼくはともだちといっしょに あそぶことができます。	.350	-.094	.054
自己効力感 ($\alpha=.73$)			
5 ぼくはともだちがおしえてくれたら できそうとおもいます。	.004	.996	.085
9 ぼくはともだちをあそびに さそうことができます。	.013	.439	.007
自己有用感 ($\alpha=.59$)			
3 ともだちはあそんでいるときぼくを みとめてくれます。	.076	.107	.838
2 ともだちはわからないことをぼくに ききます。	.421	-.068	.444

で完成を目ざした幼児用自尊感情測定尺度の併存的妥当性が確認された。よって、幼児用自尊感情測定尺度の作成は達成できたといえる。

4. 考察

予備調査の分析により、幼児用自尊感情測定尺度の作成の可能性の検討を行ったところ、作成が可能であるという結果が得られた。そこで、今回の本調査では、幼児用自尊感情測定尺度の本尺度を確定するために、予備調査に基づき、原案幼児用自尊感情測定尺度に質問項目の見直し等の修正を加えた本尺度に関して、統計的な検討を行った。まず、本尺度につき因子分析を加え、さらに、幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度との相関性を調べた。その結果、幼児用自尊感情測定尺度の妥当性と信頼性が統計的に確認され、本尺度の作成の意図は達成された。

まず、予備調査では調査対象にした幼児の人数が13名と少なかったため、今回の本調査では被調査者の人数を35名に増やして調査を実施した。その結果、統計的な検討を行うのに相応の資料を得ることができたといえる。

本調査で得られた資料につき、因子分析を行ったとこ

ろでは、幼児用自尊感情測定尺度は3因子から成り立っていることが明らかになった。つまり、幼児の自尊感情には、自分はあるなど、自分自身に対する自信を示す自己有能感因子、自分はこれくらいならできそうだと自分の能力に期待する自己効力感因子、自分は必要とされているなど自分の存在が必要と感じている自己有用感因子が、構成要素として含まれることがわかった。

次に、幼児用自尊感情の信頼性の検討を行うために算出した α 係数は相応の係数であったといえる。

本調査で得られた資料でも予備調査の場合と同様に、本尺度である幼児用自尊感情測定尺度と幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度との間には所要の相関が見られた。自尊感情を測定する具体的な質問内容を構成する過程で、本来のローゼンバーグ自尊感情尺度の質問項目の内容を幼児期の子どもが十分理解できるように修正に配慮したこと、また、幼児用自尊感情測定尺度の質問項目について、幼児が実際に経験していると考えられる内容になるよう綿密に検討したことなどが、幼児の自尊感情の測定に積極的に影響しているものと推定される。そして、この幼児用自尊感情測定尺度を構成している具体的な質問項目の内容と、それに対する幼児の反応から、予

備調査でも述べたように、幼児の自尊感情には友だち同士の教え合いの行動や思いやりの感情等が反映する対人関係と密接に関連していることを示唆する結果が明らかになった。

本調査では、従来の研究でも指摘されているように、自尊感情を規定する条件の一つとして相互的な対人関係の在り方が大切であることも推測された。そのような対人関係の中で生ずる個人の態度や感情には、多様な要因が存在するものと考えられる。

今回の調査で明らかになった、自己有能感、自己効力感、自己有用感、個人が自分一人では生み出しがたい感情であり、自分以外の人とのかかわりで生ずる感情ともいえる。また、そのような人とかかわりが、単なるかかわりだけでは自尊感情の育ちが良好であると言えないことが、予備調査や本調査の結果から示されているように、個人がなにかの課題に対する取り組みにつまずいた時、手をさしのべてくれる友だちがいることや、また異なる発達水準の友だちとかかわり合うことなどにより、自尊感情を構成しているこれらの3つの感情が発達していく側面があるといえる。

また、心身の発達水準が相応に異なる友だちとかかわり合うことは、幼児にとっても憧れであり生活の目標となる。一方、心身の発達水準が適度に高い場合は、その発達水準ゆえに褒められることが自信へとつながり、他者に物事を教える行為は、現在の能力をより深めることにつながる。このように、心身の異なる発達水準の子どもたちが集団生活を送る過程で、教え合いや学び合う等の姿勢を培われるならば、「他人と比べて自分は劣っている」や「自分にはいいところがない」などの自尊感情の育ちを妨げる好ましくない要因は、自然と作用しなくなるのではないかと考えられる。

戸戸・勅使(1990)は、集団生活の中で育つ良さや優位性について「子どもたちは、友だちのなかでのびようとするし、また、友だちに手を差しのべようとする」ことを指摘している。できないことができるようになることは嬉しいことであり、そしてその過程には適切な友だちとかかわりがあることがより、自尊感情の発達を促進させることとなるのではないかと考えられる。

実際に、今回の調査で次のような発言を被調査者から聞いた。「わたしは、お友だちと遊べないよ。出来ることが少ないから。いつも見ているだけなの」という発言は、筆者が実際に保育に参加させてもらって、子どもたちが相互にかかわり合って遊ぶ自由遊びを観察していた折に、あまり友だちとかかわって遊んでいないと感じられた子どもからの言葉であった。

年中児や年長児にもなれば、子どもは自己の遊び活動

を年齢相応に認識し、友だちの遊び活動と相互に比較し評価することが可能になる。自分と友だちを比較することによって、自分に自信がもてなくなることや、何気ない保育者の言葉に影響されて「自分はできないことがない。だめだな」と自分について消極的、否定的に考えてしまうこともあるであろう。しかし、日常の集団生活の中で生ずるいろいろな経験の機会、子ども同士の間で相互に交わされる遊びにかかわる比較評価という行為が、自尊感情の育ちを妨げるのではなく発達を促すことも十分に期待できるものと思われる。このような期待は今回の幼児用自尊感情測定尺度を作成する過程で示唆されたところでもあった。

そこで、研究2では、集団生活の中で発生する友だちと相互にかかわる遊びが幼児の自尊感情の形成にどのように関連し、さらに、どの程度積極的に影響する可能性を持っているかについて明らかにするための実践的な検討を行うことにしたい。

研究2 対人関係における遊び経験と自尊感情との関係性

1. 目的

研究1で作成した幼児用自尊感情測定尺度により、幼児の自尊感情の側面を明らかにするとともに、過去の対人関係における遊び経験と関連づけ、幼児の自尊感情の形成を規定する要因を分析する。

2. 方法

(1) 調査対象者

M県下の保育園に通う、35名の年中児・年長児を対象とした(男児13名、女児22名)。ただし、調査資料を分析・検討するための被調査者は、調査における具体的な質問を全て遂行できなかった1名を除いた34名の幼児とした(男児:13名、女児21名)。

なお、これらの分析対象とした幼児は、研究1の本調査における、被調査者と同じ幼児である。また、これらの幼児の年齢範囲は、調査を開始した時点で、4歳4ヶ月～6歳4ヶ月にわたっていた。

(2) 調査期間

調査は、2013年8月～9月にわたり実施した。この調査期間は、本研究の実施を受け入れた保育所の研究主担当者である保育者と調査の目的や内容につき事前によく話し合い理解を求め、保育所における保育実践の状況を考慮し決定した。

(3) 調査材料

本研究2では、研究1で作成した幼児用自尊感情測定尺度を活用するのに加え、本研究2で創案した友だちとかかわり合う遊びの経験の程度を測定する尺度と、砂場遊びの経験の程度を測定する尺度を使用するが、以下にこれらの調査材料の内容について説明する。

① 幼児用自尊感情測定尺度

幼児の自尊感情を構成している成分として、自己有能感、自己効力感、自己有用感の3要素を取り上げて測定する。

本測定尺度は、研究1で独自に作成を試み開発した心理測定尺度に求められる基本的な必要条件を満たす、妥当性・信頼性を備えた幼児の自尊感情を測定する尺度である。

② 友だちとかかわり合う遊びの経験の程度を測定する尺度

遊びこそ子どもにとって何よりも大切な成長の糧である(野垣, 1975)と子どもにとって遊ぶことの重要性についての指摘がなされている。また、高橋(1982)の報告では「遊びによって社会性が育ち、思考力、判断力、記憶力、創造性が養われる。幼児は教材や用具がなくとも、遊びを創造する力をもっている」とも述べられている。

子どもが友だちとの遊びを楽しんでいることでは、単に遊ぶだけにとどまらず、将来の社会生活に備え、対人関係などの必要なことを学びながら生活しているのである。

研究1で、幼児の自尊感情の発達において、対人関係も重要な要因であることが推定されたことを踏まえ、調査材料として、研究1で作成した幼児用自尊感情測定に加え、過去に友だちとかかわり合う遊びの経験の程度を測定する尺度を用いる(Figure 2)。なお、この場合、砂場遊びの経験の程度は別に調べる。

③ 砂場遊びの経験の程度を測定する尺度

子どもの遊びは多種多様に存在する。現在、多くの遊びがなされている中で、砂場遊びは、子どもが一度は経験する遊びであると言える。砂場は、子どもたちの遊ぶ環境に身近な場として存在し、保育所の園庭や地域の児童公園など多くの場所に設置されているのが現状である。

そして、「砂という素材は、子どもの不安な気持ちや、やってみようとする気持ちを受けとめる力がある」(松本, 2007)と述べられているように、砂という遊びの素材には、子どもが遊ぼうとする意図に適合する遊びを子どもそれぞれが自由に積極的に展開できる特質がある。

また、砂場遊びは、他の遊びと比べ、複雑な遊びのルールが存在しないことが普通であり、何度も繰り返し遊べる良さがある。子どもが自発的に砂とかかわり遊びを繰り返し広げていく機会には、子どもが自ら試みたい遊びが受け入れられていると実感できる場合が多々あるだろう。

そして、このように遊びを展開する中で、自分の気持ちを受けとめてもらい、繰り返し遊べる条件に恵まれることにより、子どもには何かに挑戦しようと思える機会もしばしば生じ、それは自尊感情を高める大切な要因の一つとして作用するものとも考えられる。そこで、遊びの中でも砂場遊びで経験の程度を測定する尺度を用いることにする。

一方、過去に友だちとかかわり合って遊んだ経験と自尊感情の関係性を明らかにするため、過去の遊びの経験を聞き取る質問を2項目作成した(Figure 3)。

なお、②の友だちとかかわり合う遊びの経験の程度を測定する尺度と③の砂場遊びの経験の程度を測定する尺度については、研究1の調査で得られた、これらの遊びの経験に関する幼児の口頭における反応を整理し、その意味とするところを十分考慮して、幼児用自尊感情測定尺度作成の場合と同様な方法によって、筆者が質問項目を決定した。

(4) 手続き

調査の手続きについては、研究1の場合と同様であり、

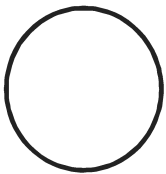
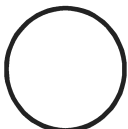


いままで ともだちと すなばあそびのほかにも うれしかったあそびは ありますか			
			
とても とても うれしかった	とても うれしかった	うれしかった	すこしうれしかった

Figure 2 過去に経験した遊びを問うために用いた反応選択肢の例

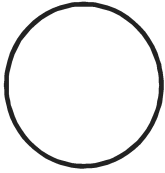
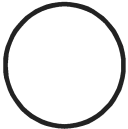
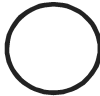

いままで ともだちと すなばあそびで うれしかったあそびは ありますか			
			
とても とても うれしかった	とても うれしかった	うれしかった	すこしうれしかった

Figure 3 過去に経験した遊びを問うために用いた反応選択肢の例

以下に示す通りである。すなわち、個別式対面面接法を使用し、面接調査時間は、被調査者一人につき、ほぼ10～15分程度を当てることとした。

また、被調査者への発問に対する回答については、被調査者に反応選択肢の該当選択肢に指でさし示すように促した。

具体的には、Figure 2の反応選択肢を見せ、「いままで ともだちと すなばあそびで うれしかったことはありますか」と問いかけて、あると答えた被調査者に「とても とても うれしかったときは4つのまるのうちで1番大きいまるを、とても うれしかったときは、2番目に大きいまるを、うれしかったときは3番目に大きいまるを、すこし うれしかったときは4番目に大きいまるを指でさして教えてください」と教示した。

これらの4段階の選択反応については、予め質問の意味が理解されていることを発問の事前を確認してある。

調査の実施に際しては、調査が円滑に行えるように、調査の事前にマニュアルを作成し、どの幼児にも同じ条件下で調査が行えるよう細心の留意をした。

なお、これらの調査においては、研究1の幼児用自尊感情測定尺度を作成するための調査の場合と同じく、全ての調査を筆者自身が単独で行った。その理由は、複数の調査者で調査を実施することにより、それぞれの調査者の間で、被調査者である幼児に対する具体的な調査アプローチに、異なる影響が生ずることを防ぐためである。

3. 結果

(1) 幼児の自尊感情における発達の側面について

研究1で作成した幼児用自尊感情測定尺度を用い、幼児の自尊感情を自己有能感、自己効力感、自己有用感の3つの構成要素から捉えた結果は、以下の通りである(Table 6)。

この結果によると、本研究で自尊感情を構成しているとみなした3要素は、得点獲得率(得点可能な最大値8点に対する百分化)は、いずれも80%を越えており、かなりの形成水準に達している実態が分かる。勿論、自尊感情構成要素全体の場合にも同様に論ずることができる。

そこで、自尊感情を構成している各要素の形成度を比較すると、自己効力感が92.63%で最大であり、自己有能感の89.75%、自己有用感の82.38%と続き、3構成要素の間には形成度が異なる結果が認められた。

このような結果については、3構成要素の平均値についての統計的な分析でも、ほぼ支持されるとみなしてよい。

一元配置の分散分析を行ったところ、自尊感情の構成要素である、自己有能感、自己効力感、自己有用感の3構成要素の平均値の間には一部を除き有意な差が認められた($p<.000$)。

そこで、各構成要素のペアごとの比較の検討(ボンフェローニの補正)をした結果、3構成要素の平均値のうち、自己有能感7.18点と自己有用感6.59の得点で平均値の差

Table 6 自尊感情の発達の側面の結果

自尊感情構成要素	人数	平均値	標準偏差
自己有能感	34	7.18	1.05
自己効力感	34	7.41	1.05
自己有用感	34	6.59	1.40
全体	34	21.18	2.69

0.59 点に有意な差があった ($p<.05$)。また、自己効力感 7.41 点と自己有用感 6.59 点の得点差 0.82 点にも有意な差が認められた ($p<.05$)。しかし、自己有能感 7.18 点と自己効力感 7.14 点の間には有意な差は認められなかった (n.s.)。

つまり、自己有能感 \equiv 自己効力感 $>$ 自己有用感の結果で、幼児の自尊感情の 3 構成要素に差があり、幼児でもすでに構成要素の形成が異なることが明らかになった。

自尊感情の構成要素得点可能な範囲は、自己有能感、自己効力感、自己有用感は 2 ～ 8 点であり、全体は 6 ～ 24 点である。

なお、自己効力感及び自己有能感の質問項目数は 2 つであるのに対し、自己有能感の質問項目数は 3 つであるため、自己有能感の得点は、粗点の 3 分の 2 倍と換算した結果に基づいている。

(2) 過去に経験した、対人関係のある遊びの経験の程度と砂場遊びの経験の程度について

本研究 1 で作成した友だちとかかわり合う遊びの程度と、砂場遊びの経験の程度から捉えた過去の遊び経験についての測定結果は、次の通りである (Table 7)。

Table 7 の結果によると、友だちとかかわり合う遊びの程度の得点獲得率 (得点可能な最高値 4 点に対する百分比) は、88.00%、砂場遊びの経験の程度のそれは 86.00% で、いずれもかなりの水準の高い対人関係の遊びをしてきていることが分かる。従って、全体 (過去の遊びの経験) の得点獲得率は 87.00% となり、その遊びの経験の程度は高い水準に達している。

この結果を平均値で捉えると、友だちとかかわり合う遊びの程度は 3.52 点、砂場遊びの経験の程度は 3.44 点であり、「とても とても うれしかった」と「とても うれしかった」の中間の水準を前後しており、いずれも過去に経験した対人関係のある遊びは好ましい経験であったことが分かり、これらの平均値について統計的に検討してみると両者の遊びに得点上の有意な差は認められない結果となった ($t=0.47$, n.s.)。両者とも同様に「うれ

しい」体験として記憶されているといえる。

過去に経験した対人関係のある遊びについては、友だちとかかわり合う遊びの程度、砂場遊びの経験の程度、いずれも得点可能な範囲は 1 ～ 4 点であり、全体 (過去の遊び経験) は 2 ～ 8 点となる。

(3) 過去の遊び経験の程度と自尊感情

次に、過去に経験した対人関係のある遊びが幼児の自尊感情の形成を規定する要因として影響する可能性を検討する。

そこで、過去の遊び経験の程度の合計点の平均値 6.96 点を区分の基準点として、7 点以上の得点を示した幼児を高群、6 点以下の得点であった幼児を低群に属する者として 2 群に分け、両群の自尊感情の得点の平均値に差があるか否か (高群は低群より自尊感情の得点が高いと予想されるとする仮説) について統計的に検討した。その結果は、Table 8 に示した通りである。

この検討によると、高群は平均値で 33.09 点を示し、低群の平均値 29.83 点より 3.26 点高い得点であり、この得点差は統計的な検討によれば有意である ($t=2.97$, $p<.05$)。

次に、過去の砂場以外の遊び経験の程度についても同様に、高群、低群の自尊感情の得点について検討したところ、高群の 32.65 点は低群の 30.45 点より、2.20 得点が高く、差があるといえる ($t=1.83$, $p<.10$)。

過去の砂場遊びの経験の平均値 3.44 点を区分する基準点として、4 点であった幼児を高群、3 点以下を示した幼児を低群に含める高低 2 群を構成し、両群の自尊感情の得点上の差があるか否かを平均値を比較することで統計的に検討してみると、高群の 31.95 点と低群の 31.92 点には有意な差が認められなかった ($t=0.03$, n.s.)。

(4) 過去の遊び経験の程度と幼児自尊感情構成各因子の平均値

(3) で区分した、過去の遊び経験の程度における高群と低群の幼児用自尊感情測定尺度の各因子の得点の平均値に差があるか否を検討するために t 検定を行った結果

Table 7 過去に経験した対人関係のある遊びの結果

遊び経験の程度	人数	平均値	標準偏差
過去の友だちとかかわり合う遊びの程度	34	3.52	0.72
過去の砂場遊びの経験の程度	34	3.44	0.70
全体 (過去の遊び経験)	34	5.94	2.40

Table 8 各過去の遊び経験の程度の高群・低群の自尊感情の平均値とその差についてt検定の結果

遊び経験の程度		平均値	標準偏差	t値
過去の友だちとかかわり合う遊びの程度	高群	32.65	3.65	1.82*
	低群	30.45	2.30	
過去の砂場遊び経験の程度	高群	31.95	3.74	0.03
	低群	31.92	2.84	
過去の遊び経験の程度	高群	33.09	2.09	2.97**
	低群	29.83	4.35	
				**p<.05 *p<.10

を Table 9 に示す。

その結果によると、自己有能感で高群が 11.45 点、低群が 10.17 点で高群が 1.28 点高い得点差は、統計的に有意な差であることがわかる ($t=2.44$, $p<.05$)。自己有用感についても同様な検討を行うと、高群の 7.64 点は低群の 5.75 点より 1.29 点大きい得点を示し、この両群の得点差は統計的にも有意な差である ($t=2.85$, $p<.05$)。

しかし、自己効力感については、高群の 7.59 点、低群の 7.08 点の得点差 0.51 は統計的には有意な差ではなく ($t=1.40$, n.s.)、高低の両群は、同程度の自己効力感を形成しているといえる。

(5) 過去の遊び経験の程度と自尊感情を構成している各質問項目別の程度の平均値の差

次に、(3) で区分した過去の遊び経験の合計点の平均値を基準に低群と高群に分け、質問項目ごとの得点の平均値に有意な差があるか否かを検討するため、t 検定を行った。その結果、Table 10 に示した通りとなった。

「2 ともだちは わからないことを ほくに きいて

くれます」の質問項目で、高群が 3.41 点であり低群は 2.75 点である。この高低の得点の差は、0.66 点で統計的に有意な差が見られた ($t=2.23$, $p<.05$)。

「5 ほくは ともだちが おしえてくれたら できそうと おもいます」の質問項目では、高群が 3.73 点であり、低群は 3.33 点であった。この得点差は 0.40 点で有意な傾向が見られた ($t=1.72$, $p<.10$)。また、「3 ともだちは あそんでいるとき ほくを みとめてくれます」の質問項目で高群 3.64 点、低群 3.00 で得点の差は 0.64 点と有意な傾向が認められた ($t=2.11$, $p<.10$)。その他の質問項目では、統計的な差はみられなかった。

(6) 過去の遊び経験と幼児の自尊感情との相関関係の検討

幼児用自尊感情測定尺度で捉えた幼児の自尊感情と過去の遊び経験の関連性を分析した。

その結果、過去の遊び経験の得点と幼児用自尊感情の得点との相関係数は、 $r=.505$ ($p<.01$) で有意な相関が得られた。従って、過去の遊び経験と自尊感情の形成には、

Table 9 過去の経験した遊びの程度の高群・低群の自尊感情の各因子（構成要素）別の平均値とその差についての t 検定の結果

自尊感情構成因子		平均値	標準偏差	t値
自己能力感	高群	11.45	.912	2.44**
	低群	10.17	1.70	
自己効力感	高群	7.59	.910	1.40
	低群	7.08	1.24	
自己有用感	高群	7.04	1.13	2.85**
	低群	5.75	1.48	
				**p<.05

Table 10 過去の経験した遊びの程度の高群・低群の自尊感情を構成している各質問項目別の平均値とその差についてのt検定の結果

自尊感情構成項目		平均値	標準偏差	t値
4 ぼくは ともだちと いっしょなら できます	高群	3.77	.41	1.57
	低群	3.36	.81	
6 ともだちに おしえてあげたら ぼくも できそうなきもちに なります	高群	3.76	.43	1.52
	低群	3.36	.81	
7 ぼくは ともだちと いっしょに あそぶことが できます	高群	3.91	.30	1.22
	低群	3.67	.65	
5 ぼくは ともだちが おしえてくれたら できそうと おもいます	高群	3.73	.55	1.72*
	低群	3.33	.78	
9 ぼくは ともだちを あそびに さそうことが できます	高群	3.86	.47	.60
	低群	3.75	.62	
2 ともだちは わからないことを ぼくに きいてくれます	高群	3.41	.80	2.23**
	低群	2.75	.87	
3 ともだちは あそんでいるとき ぼくを みとめてくれます	高群	3.64	.58	2.11*
	低群	3.00	.65	
				*p<.10 **p<.05

正の関連性があることがわかった。

(7) 過去の遊び経験が自尊感情に与える影響

幼児用自尊感情測定尺度で得られた幼児の自尊感情得点の合計点を従属変数とし、過去遊び経験得点の合計点を独立変数とした単回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table 11)。

その結果、偏回帰係数は.505 (p<.01) で過去の遊び経験が自尊感情に影響していることが明確になった。

4. 考察

研究1で作成した幼児用自尊感情測定尺度を作成する過程で、過去に経験した友だちとかかわり合う遊びと自尊感情の育ちとにかなりの関連性があることが推測された。対人関係が自尊感情の育ちに影響している大きな要

因の一つである結果を改めて確認できた。

研究2では、研究1の結果を考慮し、過去に経験した対人関係における遊び経験が幼児の自尊感情に影響している程度を明らかにした。

まず、研究1で幼児の自尊感情を自己有能感・自己効力感・自己有用感の3因子から捉えることが妥当であることが示唆されたことを踏まえ、平均値と標準偏差を算出した(Table 6を参照)。

その結果、幼児の自尊感情を構成する3因子の獲得得点は、自己効力感が最大得点を獲得しており、次いで自己有能感、自己有用感であった。自己効力感とは、自分自身に対する期待の感情であり、自分は「できるのではないか」と認識し行動することにより、自己の持っているスキルを適切に活用できる(柴田, 2005)と考えられており、そのような感覚が適度に作用し、自尊感情の発

Table 11 幼児用自尊感情得点を基準とした単回帰分析の結果

				標準偏回帰係数 β
過去の遊び経験				.505**
重相関の平方				.255
自由度調整済み決定係数				.231
				** p<.01

達を促している側面が多くあることが示唆される結果であろう。

そして、この3構成要素の平均値の差の検討をするため、一元配置の分散分析を行った。その結果、自己有能感と自己有用感で有意な差が認められた。また、自己効力感と自己有用間の間でも有意な差があった。しかし、自己能力感と自己効力感では有意な差は認められなかった。

自己有能感、子どもが主体的に活動することによって、味わうことができる感情（長谷、2012）とされている。また、自己効力感の働きも上記で述べたように、自分に対する期待の感覚であり、自己の行動を適切に運用することができると考えられている。従って、両者の感情が作用する際には、自発的な行動が求められるのではないだろうか。勿論、自発的に子どもが活動する背景には、多様ななかかわりが存在すると考えられるものである。このような背景を踏まえた結果、両者間では、統計的な有意な差は認められなかったのではないかと考えられる。

自己有能感と自己効力感との両者間の働きは、自発的な行動によって促される側面があると考えられる一方、自己有用感、他者から必要とされている・認められるという感情であり、自発的な行動を踏まえた上で獲得する感覚であるため、自己有能感・自己効力感と自己有用感の間には、統計的な差が認められたのではないかと考えられる。

自尊感情の発達の側面の結果を踏まえ、次に、各過去の遊びの経験の程度の高群・低群の自尊感情の平均値とその差について検討をした。その結果、過去の砂場遊び経験の程度により幼児の自尊感情の平均値に差が生ずる傾向は見られなかった。しかし、過去の砂場以外の遊びの程度が幼児の自尊感情の平均値に差を生み出す傾向は認められた。また、過去の砂場遊びの経験の程度と過去の砂場以外の遊びの経験の程度を合わせた、過去の遊び経験の程度も当然ながら自尊感情の平均値に差を生み出す要因として働いていることが分かった。

砂場遊びは、砂という性質と関わることによって、子どもの創造性を育むこと・運動感覚を培うこと・他者とのコミュニケーションを計ることができるなどの社会性を成長させることが可能となる遊びである。しかし、現代の課題として、児童公園等の砂場は動物の糞が散乱しているなど管理の手が行き通っていないことが原因で、子どもたちから砂場遊びが敬遠されていることが挙げられている（笠間、2001）。それは、砂や泥を触らない習慣ができていないことが原因の一つであると考えられる。従って、砂場遊びの経験の程度が自尊感情の発達に明確に反映していたともいえよう。砂場遊び以外にも対人関係のある遊びは多く存在し、展開されている。そのような遊

びの経験は、自尊感情を促す機会があることから今回の研究結果を説明できるものと考えられる。従って、対人関係が多様に存在する遊びに注目し自尊感情との関係を更に詳しく探求していく必要があることと、本研究から指摘できる。

次に、過去の経験した遊びの程度の高群・低群における自尊感情の各因子（構成要素）別の平均値とその差についての分析を行った。その結果、自己有能感と自己有用感で両群間に有意な差が見られた。

この結果については次のように論ずることができる。自己有能感や自己有用感、自分の能力が認められることや、社会の中で自分は必要とされていると感じられる感情でもある。対人関係のある遊びの中で、自分の力を発揮できたことや、自分の能力を認めてもらう経験をした子どもは、自分に自信が持てるようになり、自分を大切に思える感情を育むことができるのであろう。

一方、今回の分析で自己有能感や自己有用感のような結果が見られなかった自己効力感、自分に期待する感情であり、「自分はこれくらいなら、できる」「これくらいなら、できそう」と思える力であり、この感情とは、自己有能感や自己有用感を基盤として発達していく側面があるのかもしれない。自分はこれならできる・この力は友だちの役に立てると思えることが、新しいステージへの原動力となり自己効力感が育まれるのではないかと考えられる。そのため幼児の場合、自尊感情の発達に有効に反映していない結果となったのかもしれない。

次に、過去に経験した遊びの程度の高群・低群の自尊感情を構成している各質問項目別の平均値とその差について分析をした。その結果、「ぼくは ともだちが おしえてくれたら できそうと おもいます」の項目で得点の差に傾向が見られた。また、「ともだちが あそんでいるとき ぼくを みとめてくれます」の項目で有意な差が見られた。

この結果を基に改めて説明できることは、自分自身の自己像を作り上げていく際に、やはり他者とのなかかわりは必要不可欠であるということである。それは友だちの発達水準を知ることによって自己評価ができるからである。遊びの中で自分の能力をだれかに認めてもらえることにより、改めて自分の力を知ることができ、自己像を作りあげていくきっかけにもなるのではないかと考えられるからである。

そして、全体の分析として過去の遊び経験の程度と幼児用自尊感情との関連性の検討を行った。結果として、 $r=.505$ ($p<.01$) の相関係数が得られた。従って、過去に対人関係のある遊び経験と幼児の自尊感情の発達の形成には、関連があると言える。

また、幼児用自尊感情得点の合計点を従属変数とし、過去に対人関係のある遊びの得点の合計点を独立変数とした単回帰分析を行った。その結果、偏回帰係数で.505 ($p<.01$) の係数が得られた。幼児の自尊感情の形成に対人関係のある遊びが影響していることもわかった。

各々の幼児用自尊感情測定尺度の得点とインタビューで得られた応答を照らし合わせてみると、やはり過去に経験した友だちとかかわり合う遊びを、非常に嬉しかったと答える子どもの幼児用自尊感情測定尺度の得点は高い傾向がある。そして、インタビューに答えられない子どもや過去に友だちとかかわり合う遊びを経験していない、嬉しかった程度が少しと応答した子どもの幼児用自尊感情測定尺度の得点は低い傾向が明らかとなった。

各保育所や幼稚園で展開されている遊びに違いがあると思われるが、今回調査した園での嬉しかった遊びの種類は、遊具を使った遊びや、身体を動かす遊びが多く回答を得ていた。また、調査時期が夏ということでプール遊びなどの季節の遊びを答える子どももいた。実際のインタビューから、過去に対人関係のある遊びで非常に嬉しかったと答えた子どもは、自身の年少時代の記憶や、ここ最近ではない経験をもとに解答をしていた。また、過去に対人関係のある遊びの経験をあまり嬉しい思いをしていない子どもは最近の出来事（プール遊びや調査日の前日の遊び）を解答する子どももいた。これは、嬉しいと思う経験は記憶に残り、その記憶が自尊感情の形成に影響していることも示唆されると言えるだろう。

そして、Vygotsky (2001) が発達の最近接領域を解いた中で「共同のなか、指導のもとでは、助けがあれば子どもはつねに自分一人でするときよりも多くの問題を、困難な問題を解くことができる」と報告しているように、共同的な活動が子どもの発達水準に積極的に影響している結果が示された。

全体的考察と今後の課題

1. 全体的考察

(1) 幼児用自尊感情測定尺度の作成

自尊感情の研究は、ローゼンバーグによる研究を始め日本でも多くなされてきている。しかし、その研究の対象年齢は児童期から青年期にかけてであった。そこで本研究では、比較的に自尊感情の研究で対象年齢とされてこなかった、幼児期の子どもに注目し幼児の自尊感情を測定する尺度の作成を試みた。その際、尺度項目は対人関係を中心にした。

自尊感情を構成する要因は多様に存在すると考えられ

るが、幼児期の子どもの生活の中心にはほぼ遊びがあり、遊びによって自己の形成をしていく側面が多くあると考えられる。また、本研究の対象年齢である4歳から6歳までの子どもは、協同的な活動が展開され対人関係が複雑になると考えられ、そして、その活動の中で、友だちとの比較や憧れなどの感情を経験し、自分自身を肯定的に評価する自尊感情の形成に影響をする時期であると考えられた。

幼児の自尊感情を測定する尺度項目（幼児用自尊感情測定尺度）の内容は、保育所での自由時間の観察を行い、実際に子ども同士がかかわる遊びの中で起こっている行動を取り入れた。

また、幼児用自尊感情測定尺度の併存的妥当性を検討するため、従来から使用されてきているローゼンバーグ自尊感情尺度を幼児版（幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度）へと変更し基準尺度とした。

結果、幼児用自尊感情測定尺度と幼児用ローゼンバーグ自尊感情尺度との関連はある程度の相関係数が得られた。また、測定尺度項目について因子分析を行ったところ、3因子が抽出され、測定尺度を構成する項目が確定された。このような統計的な検討により、信頼性・妥当性のある尺度作成ができたと言える。

また、質問内容に対する回答選択肢を、幼児の感情の程度を測りたいと考えたため、○と×で表記するのではなく、○の大きさや色を替え区別することに配慮した (Figure 1を参照)。その結果、実際の子どもの感情の程度が導きだされ、幼児の自尊感情を測定することが可能であることが示唆されたと考えられる。

(2) 幼児の自尊感情の発達の実態

研究1で作成した幼児用自尊感情測定尺度の内容を用いて、幼児の自尊感情の発達の実態を明らかにした。対人関係を中心に作成した幼児用自尊感情測定尺度を検討したところ、自己能力感・自己効力感・自己有用感の3因子から自尊感情が形成されてきていることがわかった。自己を肯定的に評価するにあたって、自分を大切に思う気持ちや、自分に自信がもてるという感情が自尊感情の形成に影響していると考えられているが、今回の結果で、自己有能感（自分には能力があると思える感覚）、自己効力感（自分に期待する感情）、自己有用感（自分は必要とされている気持ち）も自尊感情を構成する要素であることがわかった。そして、自尊感情の構成要素の発達には適度なバランスが取れていることを導きだせる結果も得られた。

自己を肯定的に評価するには、自分を大切に思う気持ちや自分に自信を持てることが必要であるが、その気持

ちを構成する要因は、他者とのかかわりが影響していることがわかり、また、そのかかわり方は、友だちとの比較で優越感や劣等感を味わうことではなく、現在の自分を認めてもらえる・自分の能力が必要とされているという感覚を経験することが非常に重要であることがわかった。

従って、幼児期の子どもは遊びの中で、できる・できないでの比較や結果だけでの評価ではなく、課題に対して、子ども同士が教え合うことまた学びあえる環境、問題解決の過程を大切にできる環境を構成することが、自尊感情の発達に良好な働きかけをするといえよう。

(3) 自尊感情の発達と集団生活における遊びの役割

研究1で作成した幼児用自尊感情測定尺度を用いて、実際の幼児の自尊感情の実態を明らかにしたところ、幼児の自尊感情は3因子から構成されていることがわかった。そして、対人関係が影響していることも示唆された。

そこで研究2では、実際に幼児の自尊感情の発達に対人関係がいかに影響しているかを検討するため、幼児が実際に過去に経験した友だちとかかわり合う遊びの経験で得た感情と自尊感情との関連を分析した。

その結果、過去に経験した友だちとかかわり合う遊びで非常に嬉しかった体験をした子どもの場合は、そのような遊びの体験が自尊感情の発達に寄与していることがわかった。

実際に子どもにどのような遊びで、何が嬉しかったのかをインタビューを行った。子どもからは、「友だちが教えてくれたから」「友だちが自分をほめてくれたから」「教えてあげられたから」嬉しかったという回答を得た。また、「友だちと一緒に遊べない」「自分はできないことが多いから友だちと遊べない」という回答もあった。実際に対人関係のある遊びを経験して、教え合う、認め合う経験は子どもにとって嬉しい体験であり、自尊感情の発達とも関連していることがわかった。また、積極的に対人関係のある遊びに参加できない子どもは、自分自身を否定的に捉えている傾向であることがわかった。

このような結果を踏まえて、保育実践でも対人関係のある遊びを重視することが望まれる。その際、異質な発達水準の子ども同士がかかわれる遊びを提供したい。それは、友だちに教えてもらうことは、憧れの気持ちや目標とする理想の自己を描くことができるからである。また、友だちに教えてあげる経験は、その遊びをより質的に深めることができるようになるからである。

教え合うという体験は、友だちと比較して優越感や劣等感を味わうだけに留まらず、相手を大切に思う気持ち、また、自分もいつかは友だちのようになりたいという目

標に変わっていくであろう。

そして、自分に自信がもてるようになるとは、他者との比較の結果ではなく、過去の自分と現在の自分を比較して、少しでも成長していたら自分で自分をほめてあげること成り立つものではないかと考えられる。

2. 今後の課題

今後の課題として、最初に、本研究での対象人数が34人と少ないので人数を増やす必要がある。そして、今回の調査では保育所の子どもたちを研究対象児としたが、今後は幼稚園児や子ども園の園児と被調査者の所属保育期間についても検討することが望まれる。

そして、対象年齢を4歳から6歳までの子どもとして設定したが、結果として4歳から6歳までの子どもの自尊感情は発達していることがわかった。従って、調査年齢の範囲を広げることが今後の課題として挙げられる。

引用・参考文献

- Alan Carr. (2004). 『positive psychology The Science of Happiness and Human Strengths』 Brunner-Routledge, 204頁.
- 青柳まちこ. (1977). 『「遊び」の文化人類学』 講談社, 13-43頁.
- A・W・ポー普/S・M・ミッキーヘイル/W・E・クレイグヘッド. (1992). 「自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性を高める」 佐藤正二・佐藤容子・前田健一(訳). 岩崎学術出版社, 2頁.
- Denis Lawrence. (2008). 『教室で自尊感情を高める』 小林芳郎(訳). 田研出版株式会社, 26頁.
- 榎本博明. (2011). 「子どもの自己認識の発達—自分の長所・短所をどう知っていくのか」 児童心理, 6月号. 金子書房, 13-19頁.
- グレン・R・シラルディ. (2011). 『自尊心を育てるワークブック』 高山 巖(訳). 金剛出版, 42頁.
- 畠山美穂・畠山寛. (2012). 「関係性攻撃幼児の共感性と道徳的判断、社会的情報処理過程の発達研究」 発達心理学研究 第23巻, 第1号, 1-11頁.
- 長谷秀輝. (2012). 「幼児の自己有能感を育む保育についての一考察」 四條畷学園短期大学紀要, 45, 39-50頁.
- 今井和子. (2013). 『遊びこそ豊かな学び』 ひとなる書房.
- 伊藤正哉・小玉正博. (2005). 「自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がWell-beingに及ぼす影響」 教育心理学研究, 53, 74-85頁.
- 伊藤正哉・小玉正博. (2006). 「大学生の主体的な自己形成を支える自尊感情の検討—本来感, 自尊感情ならびに随伴性に注目して—」 教育心理学研究, 54, 222-232頁.
- 金子隆芳・台利夫・亀山貞登 編. (1991). 『多項目心理学辞典』 教育出版, 96頁.
- 笠間浩幸. (2001). 『＜砂場＞と子ども』 東洋館出版, 158-163頁.
- 小林芳郎. (1969). 「第5章 幼児期 6 社会的発達 6-1 遊

- びの発達」 石田垣好（編），『発達心理学』 協同出版，94-95 頁。
- 松本信吾．（2007）．「保育者の目からとらえた砂遊び」 発達，No. 110，Vol. 28．ミネラルヴァ書房，68-74 頁。
- 股村美里．（2007）．「実践に役に立つ背景知識」『いのちの教育の理論と実践』 近藤卓（編）．金子書房，43 頁。
- 眞榮城和美．（2012）．「自己肯定感の心理学 自己肯定感の構造——自己肯定感の栄養素と栄養バランスについて考える」 児童心理，8 月号．金子書房，10-17 頁。
- 南館忠智．（1996）．「4 章 情緒と動機の発達」 多田俊文（編）『こころの発達と教育』，八千代出版，91-110 頁。
- 夏見欣子．（2012）．「自分を大切にできない子の諸相 自分のよさに気づいていない」 児童心理，8 月号．金子書房，38-42 頁。
- 長橋聡．（2013）．「子どものごっこ遊びにおける意味の生成と遊び空間の構成」 発達心理学研究，第 24 巻，第 1 号．88-89 頁。
- 日本青少年研究所．（2009）．「中学生・高校生の生活と意識－日本・アメリカ・中国・韓国の比較－」，2 月発表。
- 日本青少年研究所．（2012）．「高校生の生活意識と留学に関する調査－日本・アメリカ・中国・韓国の比較」，4 月発表。
- 野垣義行．（1975）．『子どもの遊びと集団』 体育科教育，3 月号．大修館書店，12-14 頁。
- 岡本夏木．（2005）．『幼児期－子どもの世界をどうつかむか－』 岩波書店。
- 岡ノ谷一夫・黒沢香・案羅雅登・田中みどり・中釜洋子・服部環・日比野治雄・宮下一博 編．（2005）．『心理学辞典』 丸善株式会社，286 頁。
- 仙田満．（1992）．『子どもとあそび－研究建築家の眼－』 岩波書店。
- 心理学総合辞典．（2006）．朝倉書店，419 頁。
- 汐見稔幸．（2011）．「子どもはみんな「よさ」をもっている」 児童心理，6 月号．金子書房，1-12 頁。
- 柴田利男．（2005）．「幼児の自己効力感と対人行動」 北星学園大学社会福祉学部北星論集，第 42 号，北星学園大学，11-23 頁。
- 穴戸洋子・勅使千鶴．（1990）．『子どもたちの四季 育ちあう三年間の保育』 ひとなる書房。
- 高橋孝吾．（1982）．「創造性を育てる遊びの方法」 体育科教育，1 月号．大修館書店，41-44 頁。
- 勅使千鶴．（1999）．『子どもの発達とあそびの指導』 ひとなる書房，41 頁。
- Vygotsky．（2001）．『新訳版・思考と言語』 柴田義松（訳）．新読書社，297-304 頁。

Developments of Self-esteem in Early Childhood

Miki Nakai

AIGA nursery school

Development of self-esteem in young children was investigated by developing a scale for assessing self-esteem, and factors determining self-esteem were analyzed. In the preliminary and main research of Study 1 a self-esteem scale for use with young children was developed. This scale comprised three factors: Self-competence, Self-efficacy, and the sense of Self-usefulness, consisting of seven items. In Study 2, factors determining the development of self-esteem in young children were analyzed, by investigating correlations between various aspects of development of self-esteem and play experiences in children's past interpersonal relationships. Aspects related to the development of self-esteem in young children were examined using the Self-Esteem Scale for Young Children. Significant differences in relationship observed were as follows: self-efficacy \times self-competence $>$ self-usefulness. Next, play experiences in past interpersonal relationships were examined from the perspectives of experience with friends and experience in the sand, by using a four grade evaluation system, mediated by the emotional experience of feeling "happy." The results indicated that young children had experienced high levels of play. Correlations between levels of past interpersonal play experiences and development of self-esteem were also examined., which that in general, self-esteem developed well in young children with higher levels of past interpersonal play experiences.

Key words : childhood, self-esteem, play, interpersonal relationships